



地域を元気にする 農家の女性たち

青森県南部町は2006年に名川町、南部町、福地村が合併して生まれた新しい町。サクランボやリンゴなど果樹栽培を中心とする農業が基幹産業だが、グリーンツーリズム¹による地域振興「達者村プロジェクト」を推進している。そこで重要な役割を果たしているのが農家のお母さんたち。達者村を訪れたJICA研修員との交流で、地域を支える女性パワーが国境を越えて広がりはじめた。



「新鮮、安全、地産地消」がモットーの名川チエリーセンターを視察する研修員たち。会員は売上金の9%を納める、店員として月1回出勤するなどのルールが決められ、ルールを破ると罰金という厳しい罰則がある

八戸地方の銘菓・南部せんべいを製造する平田商店を訪れた研修員。このほか、農家の主婦が立ち上げた「ながわ百貨業部」が運営するそばレストラン「そばの里 けやく」や、ドライフラワーの加工体験・販売をする「アートセンター めいびる」も視察した



増やす「究極のグリーンツーリズム」の実現を目指している。その背景には、日本の農村が抱える共通の課題がある。南部町農村交流推進課の小笠原覚課長は「過疎・高齢化が進んで農業従事者が減り、耕作放棄地や空き家が増え、このまま何もしなければ集落が消滅してしまふという危機感から、達者村プロジェクトが始まった」と説明する。主な事業は、農業体験修学旅行生の受け入れや、農産物の産地直売、四季折々の果物の収穫などの農作業と観光を組み合わせた「通年農業観光」。各事業にかかわる住民団体が、達者村づくり委員会²を組織し、町役場の支援や交通・旅行会社などの助言を得ながら村を運営している。

こうした村づくりに重要な役割を果たしてきたのが農家の女性たちだ。中でも、100人の女性で構成され、産直施設「名川チエリーセンター」を運営する「名川チエリーセンター101人会」²の活躍が大きい。

「仲間でライバル」の女性たち

名川チエリーセンターのサクランボ特売コーナーは、平日にもかかわらず、旬のサクランボを求める多くの人でにぎわっている。隣の建物にはさまざまな農産物やジャム、ジュースなどの加工品が並び、こちらも客足が絶えない。「サクランボシーズンの6・7月の売り上げは1億円に上る」と掛端愛子会長。センターの視察後、JICA研修員は掛端さんらから、会の活動や運営について講義を受けた。

名川は昔から果樹栽培が盛んだが、価格が不安定で未収穫のまま放置されることもあった。そこで農家の主婦がそれらを加工して付加価値を高め、女性の所得向上を図ろうと特産品の開発に努めた。しかし販路がないため、町に直売施設を要望すると、自主的な運営を条件に建設されることになり、運営組織設立に向け、出資金3万円で女性100人を募った。苦勞の末、集まった86人で会を

結成し91年にセンターをオープン。周囲の予想に反し、主婦たちの知恵と工夫を凝らした加工品や新鮮で安価な農産物が人気を呼び、売り上げ・会員数はすぐに目標に達した。その後も順調に活動を発展させた会の活躍が、地域社会・経済に波及効果を与え、刺激を受けたほかの住民から地域を活性化させる活動が生まれた。「みんな仲間でライバル」と言うのは、発足時から会員の田中久子さん。一人一人が経営者の意識を持ち、競い合いながら切磋琢磨し、また、皆で話し合っただけで決めたルールのもとに厳格な組織運営がなされていることが、成功の要因だという。掛端さんは、井の中の蛙であつてはならないと、ほかの地域の取り組みを視察したり、会員の研修制度を充実させていることも重要¹と話す。

こうした「秘訣」を聞いた研修員は「自国で役立つ多くのことを学んだ」と満足した様子。また、南部町の女性の精力的な活動の視察や心づくしの交流会を通して、彼女たちのバイタリティーに感銘を受けるとも、帰国後の活動への大きな励みになったようだった。

掛端さんや田中さんも「国や言葉が違っても目指すものが同じであれば通じ合える。会の苦勞や努力の経

「フルーツ王国」南部町の危機

7月上旬、小さな赤い実をたわわにつけたサクランボ畑に、JICA研修員が目を輝かせる。彼女たちは「女性起業家育成のための指導者セミナー」の参加者。この研修では、開発途上国の女性の経済活動や起業の支援に携わる行政官・NGO職員などが、日本の女性起業家の活動やその支援制度を学ぶことが目的だ。実際に農村女性の経済活動事例を見るため、南部町にやって来た。コースリーダーの於勢泰子さんは「住民と行政の連携による地域振興の取り組みと、その中で女性の役割を学んでほしい」と狙いを語る。

南部町(旧名川町)では2004年、友だつたり遊ぶつくり農(うんぶり)をキャッチフレーズに飯想の農村「達者村」を開村した。「達者」とは「健康で長生きすること」と、物事に熟達していること。特色ある地域資源を生かして来訪者と住民が交流を深め、双方が達者になり、地域を活性化させようという試みだ。そして将来的な長期滞在者・定住者を



田中さん宅で交流会が開かれ、郷土料理も振る舞われた。農村交流推進課の横山悟さんは「国際的に有意義なJICAの活動に微力ながら貢献できることは町の誇りになる。私たちも研修員との交流から学ぶことがあると思う、地元の団結力が強まり、もっと元気になる」と言う

1 農山漁村地域で自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動。
2 会員は100人だが、「常に始まりの数字で、新たな飛躍を続ける」との意味を込めて「1」を足して101人会と名付けられた。